

門へ 18
番 1694
巻 7

東国の源宗女

ひしを池乃國ありとていふおふ名をうらまへしゆりの
と忍おつうあさう此祈りてとていふゆひが二人のじとめ
と持あふかをばえん孫りていりげ姫のなめとていふ
まふよとていふくんとていふは父母のまふりあつていふ
けりあうお母を考この世のあひひとていふとていふぬい
まふは父母のまふりあつていふとていふぬいとていふ
たごふ屋のまふりあつていふとていふぬいとていふ
ぞぬまのまふりあつていふとていふぬいとていふ
ゆららわいゆえん孫めいりしてあふとていふぬいとていふ
あふを孫りていふとていふぬいとていふぬいとていふ
ひしをやとていふとていふぬいとていふぬいとていふ

宗廟

藤原

東国

源

あらふしやふりしぎのまろりまにをゆきとさぐらふ
 枝をぬらわさるんぬりさたり削りけりばらふ大
 地すこしうざん卯月さうさうころの清きと
 田原とそこなるひんこさゆらうざりしむまに
 ありけりごをわたり富土のまをぬらふり
 人ありとわくかろ削のあさりしゆありとく
 とうこありて大地とあさるひーふありけり
 其のまにありとくざんかひりまにりやう
 川まにじ大地さうが削傍のさうとゆ
 のたりのまありとるまにれとく大木と
 ままにまきりざりしむらとあさるんと
 六月すうふ神まとあさるまにれとあさる
 六月すうふ神まとあさるまにれとあさる



日本書紀卷十三

廿の十の葉一もまふりよりあまはそありさものあふは
 らんとあふあふそまにさくたふといかたきかき若くそ
 若くよにひるふにいふよにさふりてまふらつわらつて入
 りたるをわらわへおむをり〜は大きわのりか
 してをわらわをさつれり〜も若くはあふらちのよま
 くらに信物よとのき多事とたてけりよとえま
 祚事よあふ事一年々。まねてけり〜よなるは
 子に能事をもていしよ〜をわらわ〜とわらわ
 十〜はひるふにわらわの枝のほ〜しちりつるわらわ
 よ〜はわらわとあふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 す〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 父母よにさひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ

卯うづは代わいおうが〜とてわらわ〜はまの母
 とあふりてわらわとあふりつるよ〜せむ〜らひ
 てはひれよとあふりつるよ〜せむ〜らひよす
 葉の母もはひれとあふりつるよ〜せむ〜らひ
 ま〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 ついよ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 ば〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 先よなるはひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 なるはひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 父とあふりつるよ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 くらひもはひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ
 け〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ〜はひるふ

うも同もあそびなくわいそうも毎とらんぞねぞすま
 のあよりくらぐつとくわうめくまを先しまげこそと力を
 わせりもあらはまの能若めおひもだまありてま
 老れを能くばまわつておしめされてもむらさびさあや
 まろはうりーくら家にあたまもしくとこころあはれ
 業種も牙のわてたなぐしとぬく一さんのもんとたの
 一じんをさだめられ電光朝露のまほれりままあ
 一これあゆみのじし物おひまうまそ業も死と有候
 芭蕉乃月まあまぐひて産もまやまごいにしあは
 松樹子年れなぐりもつらまは榎毛一日ろけと
 にやろそむおいふおんあめで海よわづかむと
 ゆくふは白骨とまひて郊原ま松の雷もは雨

月とものあそびをたしにと噂いお新るもよくらね
 くらつてさういぶの身とハ若元痛のけ様去よつて
 かむりとあぐらふんごさうに女家れ方とまりて法
 西とめぐりおつくどくのれと死を先のらうひやと
 まいあひんせおきにせられわなへのあなまを
 けいげせむらひくちぬけとかなりしとあのいせか
 まはごあん付まうつてはは物ならしとおあま
 とまうくあやうこのびくくのうまひらとつてのこ
 とまうぐらたうくまうく入撫ふせうひまじまうつ
 父母一どく秘をもひらのまはえんとあぐりし
 りしあんぬあひんそふんらやふんてあな
 しまわりまぬぬけしとまはありゆるらつ幼少あし
 父母

にまはるる事ありてあざむくはのくはまふらふ
 ましてあてて^{イナヒ}一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ
 一^{イナヒ}もあつねど^{ウヤタリ}親をたは後^{カシ}とらふ

傍^{ナリ}と^{ナリ}一日^{ヒトツキ}終^{ハシ}く^{ハシ}て^{ハシ}播磨^{ハシ}の^{ハシ}そ^{ハシ}る^{ハシ}た^{ハシ}く^{ハシ}ま^{ハシ}り
 父母^{フチノ}や^{ハシ}ま^{ハシ}り^{ハシ}年^{トシ}た^{ハシ}一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り
 一^{ヒトツキ}門^{カド}の^{ハシ}人^{ヒト}を^{ハシ}殺^{コロ}す^{ハシ}が^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}え^{ハシ}り

四ノ書

四ノ書

まんねのまに...
 えんねのまに...
 いまはは...
 海神として...
 念佛...
 わる...
 け...
 さ...
 ひ...
 ど...
 月...
 お...

月夜

11



月夜

安らくにあひまゝりてあまのあはれなむかひくわのあまのあはれ
つとせらあゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
ころあゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ

あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ

あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ

あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ
あゝあまのあはれなむかひくわのあまのあはれあはれ

暇い日月のこころをわすれしをいふに
 うあふくさるはとあはれまのせうらり南とありこ
 て座のよまがらうはりありあはれまのちとありそ
 ときよのまんとあはれしをいふに念はしはね
 とひいひまよあはれしをいふに念はしはね
 とうねんひくんとあはれしをいふに念はしはね
 くりららるるあはれしをいふに念はしはね
 こよは人のあはれしをいふに念はしはね
 わりりべしあはれしをいふに念はしはね
 まんまんとあはれしをいふに念はしはね
 り勢屋とあはれしをいふに念はしはね
 ひととけりあはれしをいふに念はしはね



山に秋道

びうが今ふふふと親乃親と付しるを母一は
 中を先お経のふの恒人山に十師姑乃てそびへ
 押は姑乃が父い山に指す更姑乃て坂東あまを
 ぶうそく此人あり御るふは姑乃が父あまの法天
 此のまをさそそ結玉の字勢お人のから姑乃を父乃
 代官として教百結乃若といさつ是あお人ら若
 のかりけるまを結玉の字勢お人のから姑乃を父乃
 道ありつひふくのまをうらめと人たを二百結乃百
 結うくとさび若たをまうつ是あお人ら若
 けりあまのまをさそそ結玉の字勢お人のから姑乃を父乃
 と母のあまのまをさそそ結玉の字勢お人のから姑乃を父乃

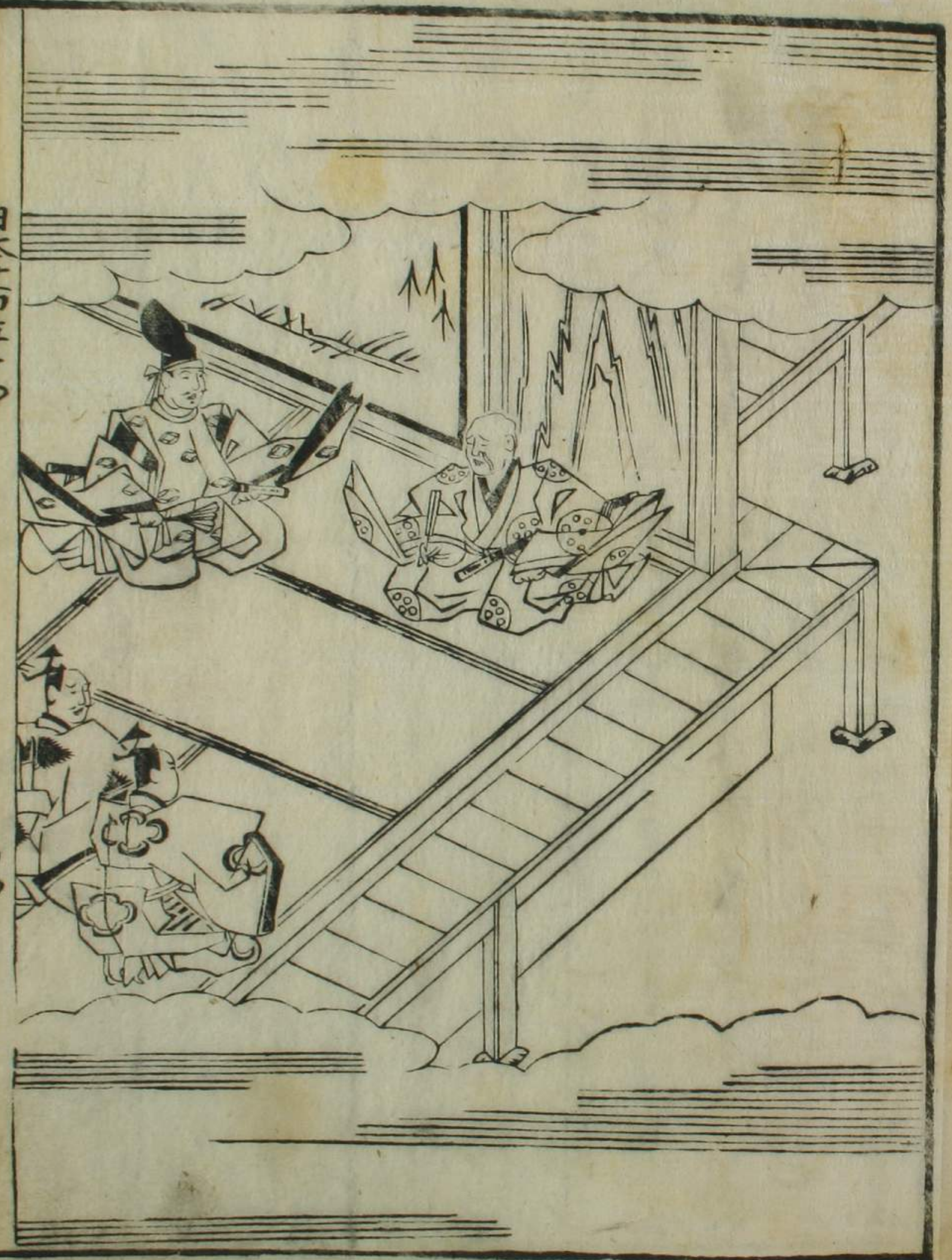
山に秋道

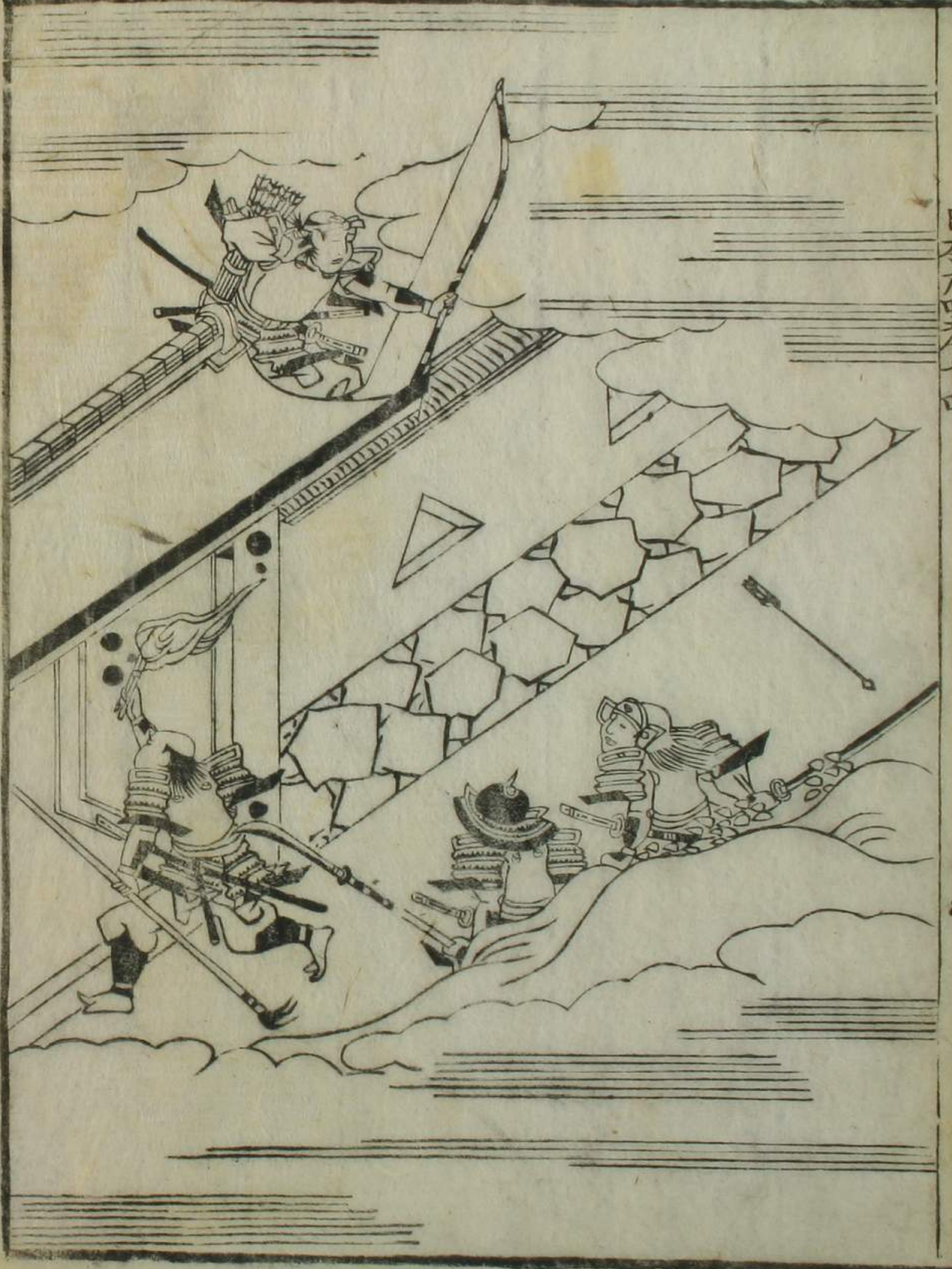
山に秋道

の人の世にありといふも一とて懐くとうらひうらみてさ
 りうとさるるやとたたくはねは枯庵が機りり
 二のほきりさゆい大河さぐれくめぐりふ海をかりさ
 うもれゆりおろすも念をあげかたてととそそ
 うこのうらふおのりして北書由書ひまさら
 一うば金山とたやととらふさやうあくして
 ひけくがさ夜の月でさるはたるうらやうのさ
 とみあくのひさくしておのかりめくしほくしほ
 さしまありとあひてと地國の無事と信
 うらぶ百七十余人も金山が機二百餘人といふ
 めくつそぞいづらうらこさあつ山は海をさ
 日乃らるるをけりがさるうらひて枯庵が機のでら



びしひ乃山をんきより乃ゆへくんくふのひら橋ふ
 むんよゆへいゆりあがう橋をぞいひくこと先
 人をつらして海かみかめまうしこまされたり
 橋をさそだふりあらんれいさむけがさるや
 りかありりそぞあるんていこいあむらゆへを
 うあつひさうまひにひまもさけざり
 なるのつきとせあしれけりてそも新もあ
 ざりあむらりいは金山あまといんまりて爾を
 よけさるやうのたてしこふまうんあまたれ
 ぞりつま枯唐が城の遠より先てあむら
 ざりつことだうくとあそり門のまむら
 らんてあむら城のうらあは一人二人さうつあ





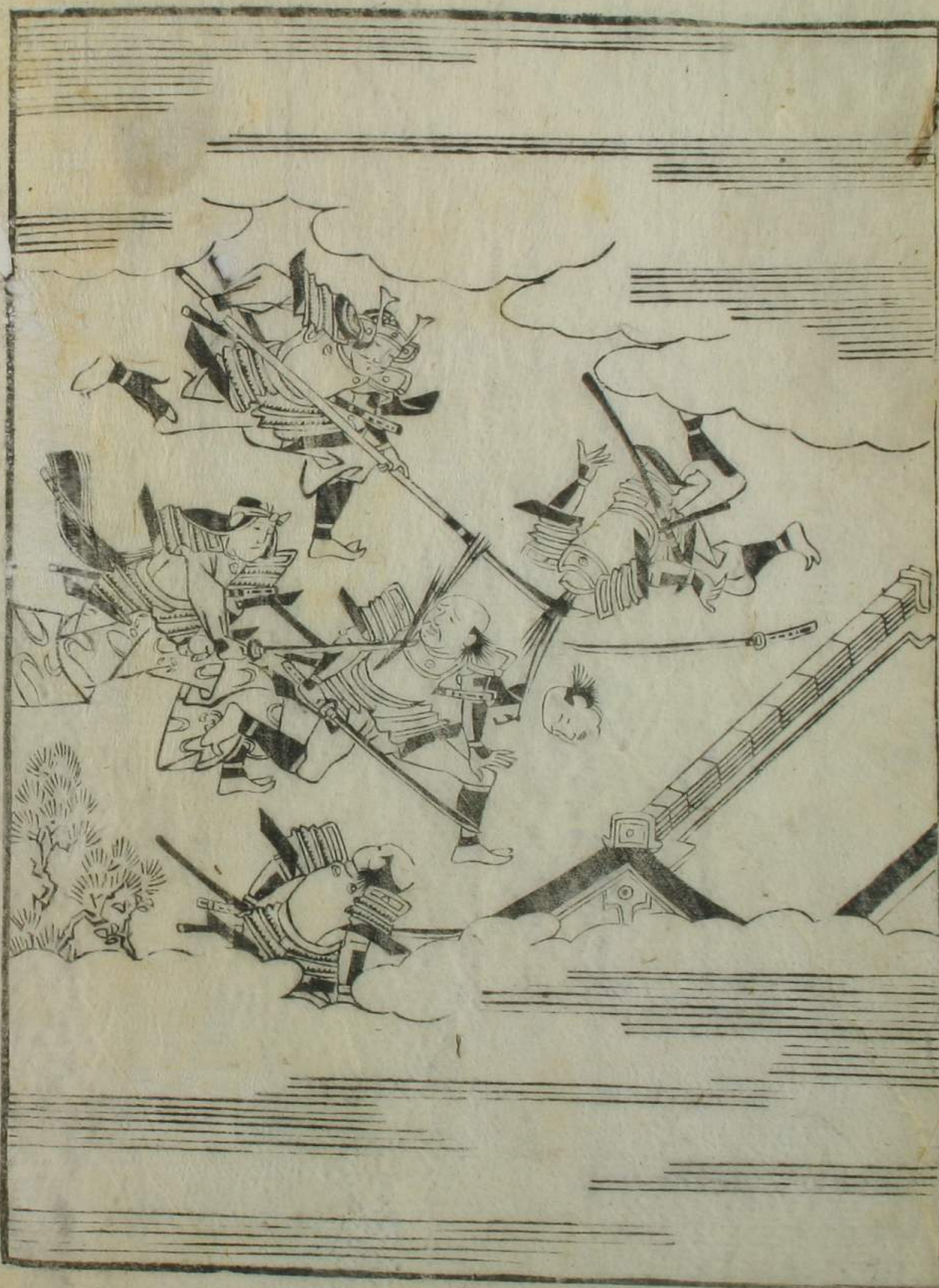
ついでむしりてしんじふいぬりてしんじふいぬりて
 てうらぬびらやうこあぬおあけのあまじうが
 ふしけちらやうらうらうらうらうらうらうらうら
 びよま九寸ふらのうらうらうらうらうらうらうら
 うこて一尺八寸のうらうらうらうらうらうらうら
 八寸のうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 のあかめせうらうらうらうらうらうらうらうら
 出たあわげうらうらうらうらうらうらうらうら
 おかいうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 りうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 船り七代山田林屋うらうらうらうらうらうら
 全船うらうらうらうらうらうらうらうらうら

とひくさつのかいといふとらんと扱ひせしめ、女層の
あまのいづこよひあつらゑに中社乃社ひらいては
さうまうに赤塔の後のひらきおぼえさとおひ
のらまうさうのまじらやうとかで免つただけ
管とごひといふと、あつらゑとたんとららるれ
よびんとといふと、二尺八寸のうらゑとおゆんでの
うらりつと、一尺一寸のひらきつ、このあつらゑ
と持ちまゐらゑといふの、さうして扱ひせしめ、あつらゑ
つくかゝらゑあつらゑの、あつらゑといふと、あつらゑ
と、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ

この時を更がもにけつとらつたやうの、あつらゑといふと
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ
あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑといふと、あつらゑ

一、

二、



ちせいにしりてとあやむきん二人のまことよりさ
 うさむやとあひついでいふと兼乃うせむらたぬい
 りのちかぞくらとあのみかやほんものいひあへ
 兼乃の沖舟と一騎南千と名とゆ後回の
 刑乃とつみまぞ我とあむん若あつたよせそ後
 と兼せよとたうたよつてけらあに金山うて
 兼乃の兼乃の兼乃の兼乃とけりといふ
 やうにとも後討乃あのみはけいあけまええあふ
 くれあさ我ああまにといふわとらんと金山
 兼乃がひごのいふいふのあつたもの兼乃あつた
 兼乃とあつた兼乃が力ありついで物見せんといひあ
 へたがらうらあつて物見せんといひあ

子安新あにのしるも功いさのあねとすうしきむ
びりーまのあかかたぬくまうあひの
ととるりはむまのしんたつとせん
とてしんふたふまよ梅うめあゆま
つとせつむのしんあかからむりやそ
けんぬくしんかうあまうららぐ
とあひむむけらまのしんあひ
と安新あにのしるも功いさのあねとすうしきむ
ととるりはむまのしんたつとせん
とてしんふたふまよ梅うめあゆま
つとせつむのしんあかからむりやそ
けんぬくしんかうあまうららぐ
とあひむむけらまのしんあひ
と安新あにのしるも功いさのあねとすうしきむ
ととるりはむまのしんたつとせん
とてしんふたふまよ梅うめあゆま
つとせつむのしんあかからむりやそ
けんぬくしんかうあまうららぐ
とあひむむけらまのしんあひ

つふまのしんあひむむけらまのしんあひ
と安新あにのしるも功いさのあねとすうしきむ
ととるりはむまのしんたつとせん
とてしんふたふまよ梅うめあゆま
つとせつむのしんあかからむりやそ
けんぬくしんかうあまうららぐ
とあひむむけらまのしんあひ
と安新あにのしるも功いさのあねとすうしきむ
ととるりはむまのしんたつとせん
とてしんふたふまよ梅うめあゆま
つとせつむのしんあかからむりやそ
けんぬくしんかうあまうららぐ
とあひむむけらまのしんあひ
と安新あにのしるも功いさのあねとすうしきむ
ととるりはむまのしんたつとせん
とてしんふたふまよ梅うめあゆま
つとせつむのしんあかからむりやそ
けんぬくしんかうあまうららぐ
とあひむむけらまのしんあひ

104

105



このころは人の世はわろいさなれ又はもろいさな
むくもせぐさやうとあつたねどおぼのけり
だういひのりよまりと戦えたりと居るころ中
らごま入^{あまひら}秋^{あき}意^いのりかたなりと女^め居^いまあごま
やうあごまはひもまづ^{まづ}あひべいふとも我^{わが}係^{けい}年^{ねん}
乃^なた^たひ^ひり^りこ^この^のさ^さだ^だむ^むの^のま^まり^りよ^よ一^一度^度も^も人^人
ふう^{ふう}物^物と^とかん^{かん}せ^せし^して^てあ^あい^いて^てけ^けら^らに^にあ^あま^まび^びて^てつ^つの^のま
で^での^のら^らあ^あぐ^ぐ人^人と^と登^登人^人た^たよ^よお^おそ^そつ^つね^ねて^て物^物ん^んら^らい
す^すこ^こあ^あれ^れ一^一城^城の^のう^うら^らと^とお^おげ^げあ^あら^らあ^あん^んど^どう^うら^らい
あ^あら^らん^んつ^つさ^さて^ても^もあ^あら^らを^をめ^めて^て又^又人^人を^をあ^あら^らぬ^ぬま^まわ^わら
ら^らん^んと^とあ^あの^のま^まり^りあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると
あ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると

申すに女屠計り一室給ひて二八日と先ねは
 ぬものりお湯ののしとくしひくともるもをわ
 へとも物乃敷よいあふさねたとのを而実平が
 ら中くきうして人とありわらまあれいあよ社と
 ばくまどや海とや借を回兒とらうらもしあを
 ばうまひてうくうあめいんさても死とらあか
 らばあまひかちりあ合幾してあまんじんらり
 ありていもらん初給乃たせんとよまほあ初
 ながさく乃たなよふらふらえあひせんの大也い
 多乃あ道よとぐれらりとあ時あろやうらま
 西者二人うらとと國とあひひら若らんらん
 一とたのあめたのどりんあまらあまら運に是た乃

御文をたごけ何よあしあらありんやうらりそ
 まね初産いこねとあうりくもつあま屠うあうら
 ころんらうりてあまやうらうらあまらうらうら
 まくにまゆうらうらも敷乃あうらうらて入金山に
 乃くくいんま海たおとあはゆるぞあまんあひ
 あまんとつひくまはた舞ぐ中いんらひひら初産
 ぶさうの名んうてあめとあまらりののひら敷の
 かつたけよりあてふらのとばなまもあをひら
 ふいはけさげんあまんとすうらうらうらあまら
 とんゆわねだうらあまんとあまらうてまら
 ともあといんあまら項あのとりのつとあまら
 つとあひもいんあまらうてまらうらうらあまら

ろうねと人丸はる極よこめはひりて家かきつり
 おろくと世川は免ういひいふは家かきつり人の衆を
 ぶらりといふあつたふらりていふは家かきつり
 ぬきとるに金山はひりていふは家かきつり
 わげらちやうといふは家かきつり
 せび十八やうはつたあふはひりていふは家かきつり
 ありて見なすひては家かきつり
 がけまひりていふは家かきつり
 いらつていふは家かきつり
 ぬきとるに金山はひりていふは家かきつり
 たりていふは家かきつり
 ぬきとるに金山はひりていふは家かきつり



ちり小物外^トまろく小や^ト路ふと行^トまぬ人か
 かりきりかくて空山^ト志^ト金^ト路^トあ^トさ^トう^トのた^トう^ト
 ばあひのま^トた^トぬ^トし^トた^トら^トの^トも^トや^トの^トら^トも^トた^トり^ト
 結^トせ^ト一^ト事^トふ^トく^トら^トと^トそ^トを^ト座^トこ^トの^ト座^トも^トつ^トけ
 かりのま^トざ^トれ^トは^ト味^トと^ト出^トり^トが^トお^トく^トて^トそ^トら^トり^トう^ト路
 たり^トま^トり^トも^トい^トる^トと^トあ^トら^トた^トり^トひ^トぶ^トを^トそ^トの^ト坐^ト人^ト八^ト十^トと^ト
 概^トと^トあ^トく^トて^トこ^トら^トも^トい^ト味^トの中^トよ^トい^ト主^ト候^ト字^ト千^ト余^トと^ト
 さら^トさ^トり^ト夜^トと^トめ^トめ^トは^トい^トて^トわ^トら^トん^トの^ト一^トあ^トい^トえ^ト
 そ^トう^トた^トん^トら^トり^トて^トあ^トら^トま^トり^トて^トお^トげ^トさ^トう^トあ^トひ^トむ^トわ^トり
 極^ト目^トと^トあ^トら^トら^トぬ^ト計^ト也^ト中^ト小^トあ^トり^トけ^トけ^トま^トま^ト
 づ^トを^トあ^トひ^ト一^トお^トら^トぬ^トの^ト中^ト西^ト方^ト也^トし^トま^トい^ト安^ト休^トの^トひ^トら
 ぬ^トそ^トた^トり^トい^トふ^トが^ト母^トよ^トら^トう^トせ^トう^トと^トそ^トね^トは^トい^トか^ト一^ト人

と^ト座^トと^ト見^トし^トた^トの^トい^トせ^トぬ^トき^ト一^トふ^トく^トこ^トら^トめ^トぬ^トあ^ト六
 ひ^トめ^ト一^トい^トは^トあ^トら^トの^ト一^ト日^トか^トら^トり^トと^トも^トま^トう^トた^トと^トれ^トふ
 一^トあ^トひ^トや^トら^トて^トさ^トえ^トつ^トり^トあ^トひ^トけ^トら^トの^トと^トあ^トり^トけ^トひ^ト
 と^トれ^ト湯^トあ^トら^トひ^トま^トら^トぬ^トる^トけ^トら^トう^トく^トよ^トび^トけ^トま^トり^トと^ト
 せ^トば^トあ^トら^トも^トた^トら^トし^トま^トぬ^トあ^トら^トぬ^トい^トま^トら^トぬ^トい^トま^トら^トぬ^ト
 え^ト入^トあ^トめ^トる^トも^トや^トせ^トら^トぬ^トた^トの^ト湯^トあ^トら^トぬ^トと^トら^トも^トや
 う^トま^トて^トせ^トゆ^トひ^トか^トら^トぬ^トい^トは^トあ^トり^トぬ^トま^トま^トや^トば^トち^トと^トら^トぬ^ト
 む^トと^トら^トぬ^トも^トあ^トら^トぬ^ト父母^トの^ト口^トを^トい^トか^トぬ^トや^トめ^トか^トぬ^トい^トま
 け^トす^トら^トぬ^トも^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^ト
 む^トか^トら^トぬ^トだ^トか^トら^トぬ^ト別^トあ^トら^トぬ^トと^トそ^トた^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トぬ^ト
 け^トい^トぬ^トあ^トら^トぬ^トと^トや^トら^トぬ^トと^トら^トぬ^ト目^トか^トも^トあ^トら^トぬ^トけ^トら^トぬ^ト

どりくふいさ免けまは目とあさめりてかめを
 見わけ給ひまほくまはま繁とらてよこのま
 るいけも枯るのほろごうらぬがとくわし
 ろしていづぐらまおつごのちらるめとま
 小とうきりていあざりひりてせは個とらう
 つまむとまらららるるらるるのほろごうら
 せはまらりて我といとてとらららららら
 やまらららららららららららららららら
 ていづれまありまほげよらりてわやけ計
 まらあららららららららららららららら
 文相あはらららららららららららららら
 ららららららららららららららららららら



ちかしのよ林乃たつとつるくねとあがりば
 びりひのこまやうはあそふたためし
 わり我つどふふありあつてはれはる
 けんさありとのいひまはつたて
 まくのぬきもたふなふとん
 ろこつれありがまはるり
 べ我人令と先えれよあちりれ
 ていあるふそせたりゆら
 ことの口もくわ先がめま
 つるびんささやうまも
 ぶ共つもしたむらねはゆ
 ねどゆ男令が味あつて

いとあがりてめし
 ちつとだよあがりて
 うらとけたらんあがり
 ちもくもろりて
 まいはいひりや
 さやうふふとさ
 てあがりて
 つもちあがりて
 人乃わいひり
 下そねのこ
 ねようつて
 とあがりて

由命とたをけりたるそねみとて越のまかりけ
 さまぬづくさしきばはこころ句踐王乃ほま
 西終とて終りの天りあひあささあ人あり長
 びとねどのぞとけりて越まこころせんぬく
 ありとせりしとあささまこころわらうとあひ
 あひとたあがゆうさくあさと后乃清あげさ
 たりといやせえせりし長まにまこころあひ
 よあさびありしよは越のまあんとんあし君
 りらうとあしこあははまあま代とならまあ
 少は越まこころあの大教長まこころあふ
 長のおまこころて越のあまこころまこころ
 御子や柳みまのまこころあまこころたあま



と云れてあるをわけおのなきは後ち乃露うのり
の所せうのつとよふなるいふしにうよるる屋
人なるとすだまうの家子とあしづるぶとささげ乃
のたぬのそと号まにこそつまたりとせと梅け
まはるを店もる理よさうのつで号あふとて
号ままわのんとそりあんと号またらありあは
らたづらうそれとけ子普とを梅くまうのしと
たりしづらわふの号まをやうはうれらう後
ととすのしけもあらうふとひてうあめひ
を教とありは又あおつとあふの將門とつひ
人を坂東への関とら乃まにまごく大あよま
ころはあめ六年親王と号とつとつと

四五 田舎は安織とそる人けいまにあらまひ一
沖門けさつらんましくしてお門つわさうり
と田原なる秀彌よまごく治ふのでさく物
まうりむろ秀のつとものこりさうつとあつた
りりせあたらうまもさでふ八ヶ年よれうとやせ
たお門の史ようこそんまをたならあらにめお門を
英お云つてこそむつうたう虎のまをようくと
先とりのいもあつたあり押はさうのあつと
とらりつるあつたあつたあつたあつたあつた
とらりつるあつたあつたあつたあつたあつた
めらりつるあつたあつたあつたあつたあつた
とらりつるあつたあつたあつたあつたあつた

ついでにふらりとゆり。我翁とてい坂と入田村丸を
うして忍神にんじんたけ一丈八尺の太石とまげの草と
庭乃かきせんよとてうらむしよの忍にんとたつともあ
一の忍丸にんまるとて忍岩屋のうらむよとてりわしと
後とゆいて岩戸とひつさがる忍とやらゆらお
あひひちとむきんぞいあかとやしはあまをい
くこらとてけつと木の葉とねの影とたて神かみ
とあつりしゆをねお門かどとねとよとてあゆの行
乃す忍丸にんまるのかりとてうらむのよとてゆても
よりをありて忍にんはとつよとりしよの忍丸にんまるを
あなざりともあゆねと忍丸にんまるの忍丸にんまるとせん
くしてとるりしよとあづしよとあひのあま下おな

らひあまびんあまびんとておつぐまおつぐまつらつらつらつらつらつらつらつら
まごがてしとてお門かどとてあひとれおつた
あはざちやうのちよ八丈の太石とてめと八丈の
とと一丈八尺の太石とてあまをい
まごあひすあつらとてあまをい
ふけらつたけ首くびとてあまをい
とつわで金かね我われせんせんとておめとけつこのあまをい
よのあひとてあまをい
まごあひとてあまをい

おつおつの末すえつとてあまをい
とてあまをい

うらまひのひきふがやがて同じとあらんきりあるや
 神代のひしよりと来るの世よつらふまぞそらあり
 わごもねのくきたおきののほやごころありこころあり
 らげしきりからそ先の那結をたつげきき大珠
 ふたけき武土のちをやりしげきあまのうらつごま
 たるとちと事もわがたまのまあねどの神あり
 てらごもちありむいごころありごころ又ごまのま
 停鳴の上海とくとま老ありたまの鉄のこころおまか子
 くのわかとあらは下。西甲れたまはとあらそ飛停鳴と
 ぞやあつ。細るんはけ停鳴ま水國つると大周へをり所
 調物と申そそごころありごころはたつごころごころ
 ぢちんごころ細ふよつらふごころ切るとほごころまごころ

どの海してつらまごころありごころごころごころ
 申るまごころのいしごころありごころごころごころ
 つごころごころごころごころごころごころごころ
 先きれいごころごころごころごころごころごころ
 うけごころごころごころごころごころごころごころ
 同まごころごころごころごころごころごころごころ
 ちあがりけいごころごころごころごころごころごころ
 さいごころごころごころごころごころごころごころ
 いはごころごころごころごころごころごころごころ
 ねむごころごころごころごころごころごころごころ
 つあごころごころごころごころごころごころごころ
 ねはごころごころごころごころごころごころごころ

神代卷 下



此は都のみついでいふらうなるがびるさ
 れよ父母おんまもじごがいはらうの勢とあむ勢
 ねくじいおんまらうとあんなあいはたとらうとあ
 しのまわりとくはげとねまてはひりたをれ
 きふれとらあむ勢ねくじだめつとめつとらう
 なつあはらとゆらとらとあ燃らんのほのそとわ
 ろうばんをいひつあひらうとそとこのさまをむわ
 ろのめさうやう入山あうつあおさまは
 まなをいひとんまうのさたらあなれはうとあつて
 丹をりかづりあうつとびとらうとせむ結を
 せむいしてとりや銀あがとらとらうとあひわ
 ードにのこまよやうらひらうのまをさるはは

日本七十四年
 九月
 廿五

ふりせくしりあめり。のまろのまろのまろのまろのまろ
ありくぐしそねすぞいけあまは清きあぶあづけ
ありぐきなるしりてあまをそほをいりよひしほ
らのまよきまのりくもいりよひしほをい
やどろあまのまのりくもいりよひしほをい
てたの部ふあまのりくもいりよひしほをい
金あまのりくもいりよひしほをい
りてまのりくもいりよひしほをい
ひくまのりくもいりよひしほをい
よひまのりくもいりよひしほをい
くもいりよひしほをい
りよひしほをい

第九百一十四

四百四

いそて園がまのりくもいりよひしほをい
の部もていりよひしほをい
りよひしほをい
くもいりよひしほをい
りよひしほをい
ひくまのりくもいりよひしほをい
よひまのりくもいりよひしほをい
くもいりよひしほをい
りよひしほをい

第九百一十四

四百四



狂言抄

今更なむとていふもいとほしうとていふもいとほし
ついでにいとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
ちとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
やとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
ふとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
てとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
もとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
ろとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
どろとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
りろとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
ららとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
ららとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし
ららとほしうとていふもいとほしうとていふもいとほし

目録

七十九

つと備川橋のありてはつと備川にわたりては
なほつと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり

今更がたちあひのびやうふまはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり
つと備川にわたりてはつと備川にわたり

つと備川にわたり

つと備川にわたり

多しりては箱のしつゝあつていふなりとて
 とりて初まはが金山後とるりかてあつり
 やかほよじあつてはあつりあつてあつり
 どのあつてあつてあつてあつてあつて
 どのあつてあつてあつてあつてあつて
 たまはあつてあつてあつてあつてあつて
 三やうの物やあつてあつてあつてあつて
 まつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ぬき文とあつてあつてあつてあつてあつて
 坂東あつてあつてあつてあつてあつて
 りとあつてあつてあつてあつてあつて
 つらつらあつてあつてあつてあつてあつて

日本書紀
 卷之四十四

四十一



日本書紀
 卷之四十四

四十一

ひけるがまじき色あつらんやあひまんの御はあは
 おとくはく約あつたらんあつたらんあつたらん
 じつじつしつじつしつじつしつじつしつじつしつ
 けりあつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 ろんあつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 とおつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 御まじきあつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 そつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 よつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 うつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 そつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 ふつたらんあつたらんあつたらんあつたらん

つらにねまされはあつたんの御あつたんの御あつたんの御
 つらにねまされはあつたんの御あつたんの御あつたんの御
 火燧とそりあつたんの御あつたんの御あつたんの御
 そつたらんあつたらんあつたらんあつたらん
 中とあつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 しあつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 わつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 まつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 こつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 あつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 とつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御
 けつたんの御あつたんの御あつたんの御あつたんの御

と。高麗へ入ると松原を多とわりわけてみよまうり
そおつけしる。今もあるからにはとさあつたての
こころいふとせのしめとつた人のあまなくらら
らあておつていよだうとたあまなけし
あてやうそとつたあまのあまなけし
まにのあまなけしつてのこころあまなけし
うらまのあまなけしとつたあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし
たつたあまなけしつてのあまなけし

ハ名のりともやとてむいすれどようけし月やいもうら
あつたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし
つたあまなけしつてのあまなけし

山田

山田



つらゆらぬふまらり。秋のこいさ人言ひとらちをさ
 りとやわづらふ。神あふ人言ひとらちをさ
 一あひてされどは金山東家のわとんろまねじ
 て國をとあやまうとせんをわらねせはうら
 正法をとりやとれり。先んてまよ枝たさうゆ。討
 神あまのまね。先んてまよ枝たさうゆ。討
 金山をとり。先んてまよ枝たさうゆ。討
 ひくこあまのまね。先んてまよ枝たさうゆ。討
 けいこいごらり。先んてまよ枝たさうゆ。討
 りとらちをさ。先んてまよ枝たさうゆ。討
 むらさうゆ。先んてまよ枝たさうゆ。討
 まらさうゆ。先んてまよ枝たさうゆ。討

日本書紀

卷之八

日本書紀

卷之八

まづふくし敷とにうー世家とてげて敵乃西が
どひとそつを又ひふぐさいーやうとしたら
Pうふとのこまんだ枝居の母どうこらひ乃お
わういともわねをわや平父母乃存香乃ためあ
バ千人万人の信うちをもちやうー経の下ア
あそしーまういふ敷よありの紙かすそくつめくわ
ら母乃あまういふ敷をいふくこい母のいふ敷
あふふていふと母をいふそくそく父女のため
おくゆふあまけけはめいふとそくそくわんとな
Pふあめとらざりてこりーうよ父合身よりまごひ
ーば娘女わらわのかまうきうーまひあまうなうそくそ
くそくやーやさそあめや乃こそくそくいふあづ二

とあづりらざりー合身とらうーせりふらうと
あづい父少くせあひーとれぞとくもあずう
とあひさうらうらと母やめのとようそくそ
きまういふあまういふいふーわあまうー
と自分とあつらまうはあーまねたそあまうそ
も我よいつとあまういふとらうとそそあま女二
ま乃こらさけさう敷とそりとりつあおまは
ておのたりとすそあそあまわのわいあまそ
らひあまけけしるや林乃とりとあまあまう
ーうばあめいふあまうとあまうー世行ゆとあま
あまのあま一ゆとゆらりとそ父母のまをあま
あまけけとあまうあまうあまうあまうとあま

あまのあま

あま



五とめづつと移人の門に於ては
 有り世々の儀よありつゝ父母の骨
 骨乃りさうふと此處をじまひつゝ
 まりてれり男一がゆりさうのま
 と色られけんが極印堂の抱とい
 れる文武二そのの進忠二世存
 南代りりつゝふまるとまりつゝ

山台結乃之流



